

## 論文の要旨

論文題目	同年代の初対面同士の会話に見られるスピーチレベル・シフト — 日本語母語話者と台湾人上級日本語学習者の比較
氏名	陳 文敏 (Chen, Wen-Miin)
学位	博士 (文学)
授与年月日	平成 15 年 3 月 31 日

我々人間はコミュニケーションを行う際、情報伝達のみならず、対人関係の調節も同時に行おうとしている。例えば、日本語の会話においては場面、相手との関係などによる「デス・マス体」か「ダ体」かの発話末尾の形式の選択、及び会話の途中における「デス・マス体」と「ダ体」の切り替えがその典型的な例として挙げられる。このような、場面や人間関係に適した言語表現を選択する能力は社会言語能力をなすものであり、日常生活を営む上で不可欠な能力である。

本研究は、対人関係の調節を担うスピーチレベル・シフトに焦点をあて、(1) 日本語母語話者同士の会話におけるシフトの実態及びそのコミュニケーション効果を解明すること、(2) 日本語母語話者と台湾人上級日本語学習者の接触場面の会話を分析することによって上級日本語学習者のシフトの実態と問題点を明らかにすることを目的としている。

本稿は以下の 8 章からなる。

- 第 1 章 先行研究
- 第 2 章 研究方法
- 第 3 章 スピーチレベルの分類とその分布
- 第 4 章 「ダ体発話」へシフトしやすい状況
- 第 5 章 スピーチレベルと終助詞の共起
- 第 6 章 「中途終了型発話」の表現形式と生起要因
- 第 7 章 学習者に共通した問題点と個々のプロフィール
- 第 8 章 結論

以下では、順次それぞれの章の概要と主な分析結果について述べていく。

第 1 章では、先行研究について整理した上で、本研究におけるスピーチレベル・シフトの捉え方を次のように規定した。

スピーチレベルとは、発話の末尾にくる表現形式の丁寧さのことで、基本的に「デス・

マス体」と「ダ体」の2つがある。1つの会話において同一人物の発話の丁寧さが変化することがある。つまり、「デス・マス体」から「ダ体」へ、または「ダ体」から「デス・マス体」へと切り替えられることがある。本稿では、その現象を「スピーチレベル・シフト」と呼ぶ。

第2章では、会話資料の収集や処理などの研究方法について説明した。使用資料は、同年代の初対面同士の会話で、日本語母語話者同士による母語場面の会話（8組、219分）と、日本語母語話者と台湾人上級日本語学習者による接触場面の会話（16組、551分）の2種類である。分析の対象は「言い終わっている発話」のみに限定し、一発話を分析単位とした。

第3章では、発話のスピーチレベルを「デス・マス体発話」、「ダ体発話」、「中途終了型発話」の3つに分けた。この分類を踏まえて、1つの会話においてある話者に最も多く見られたスピーチレベルを、当該話者にとっての「会話の基本スピーチレベル」（以下、「基本レベル」）と認定し、日本語母語話者と台湾人上級日本語学習者における発話のスピーチレベルの分布を比較した。

分析した結果、日本語母語話者の「基本レベル」は8名全員が「デス・マス体発話」であるが、台湾人上級日本語学習者には「デス・マス体発話」の者が5名、「ダ体発話」の者が3名いることが明らかになった。フォローアップ・インタビューの結果、「基本レベル」が「ダ体発話」である3名の台湾人上級日本語学習者はそれぞれ「基本レベル」の選択理由が異なっており、そのうちの1名はスピーチレベルのことを意識せずに会話していたことが分かった。

「基本レベル」が「デス・マス体発話」である8名の日本語母語話者（以下、母語話者）と5名の台湾人上級日本語学習者（以下、学習者）を比較した結果、母語話者より学習者のほうが「ダ体発話」の使用率が高いことが判明した。「ダ体発話」の使用率と性差についても調べたが、人数が少なかったため、母語話者の場合も学習者の場合も明確な結果は得られなかった。

第4章では、まずスピーチレベル・シフトの定義を確認しながら、本研究におけるシフトした発話の捉え方を示した。ついで、学習者は母語話者に比べてシフトしたままの「ダ体発話」の比率が高いことを指摘した。このことは、学習者のほうが一旦「ダ体発話」へシフトすると元の「基本レベル」へ戻るのが母語話者より遅れること、つまり「ダ体発話」を連続して使用することが多いことを意味する。

次に、「ダ体発話」へのシフトに焦点を絞って、まず母語話者の資料を分析した結果、「ダ体発話」にシフトしやすい8つの状況が抽出された。この8つの状況はさらに次のように3種類に分けられる。

- ①情報の受信を示す時：①相手の発話の一部を繰り返す時、②先取りをする時  
②情報の整理を表す時：③自己発話に対する補足・例示をする時、④情報内容の自己訂正を行う時、⑤何かを思い出しながら話す時、⑥適切な表現を模索する時  
③感情の表出を行う時：⑦相手の発話内容に感嘆を示す時⑧自分の心情を吐露する時

この8つの状況で出現した「ダ体発話」、「デス・マス体発話」、「中途終了型発話」の数を調べた結果、「ダ体発話」へシフトする頻度は8つの状況において一様ではないことも分かった。

これらの状況で現れる発話が「ダ体」になりやすい理由は次のように考えられる。①～⑥では情報の受信や整理が行われており、話者の意識が相手に対する配慮よりも情報処理に向けられやすい状況だと考えられる。このことが「ダ体発話」へのシフトを引き起こす一因になっていると思われる。また、⑦と⑧に見られる感情の表出そのものは相手がいない場面でも可能であり、その時は当然「ダ体」が使われる。つまり、状況⑦と状況⑧では、相手のいない時と同じ「ダ体」の使用によって、飾り気のない率直な感情であることが伝わると思われる。

「ダ体発話」へのシフトの機能について、フォローアップ・インタビューから得られた報告と照らし合わせて考察した結果、相手に親しみを表し、話しやすい雰囲気を作り出すというコミュニケーション効果があることが確認された。第3章で見た母語話者が「デス・マス体発話」を「基本レベル」にしていることと合わせて考えると、母語話者は初対面の相手と会話する際、失礼にならないように主に「デス・マス体発話」で話しながら、シフトしやすい状況の特性をうまく利用して「ダ体発話」へシフトし、円滑かつ効果的なコミュニケーションを行っていると言えよう。

一方、上記の母語話者の結果に基づき、学習者における「ダ体発話」について分析した結果、次の3点が判明した。第1に、上記の状況①～⑧における学習者の「ダ体発話」の全体的な出現率は母語話者より低い。第2に、状況⑦では「デス・マス体発話」の出現率が「ダ体発話」より高く、状況④では使用例が少なく、かつ母語話者に全く見当たらない「デス・マス体発話」が使用されている。よって、状況④⑦はシフトしやすい状況とは認められない。第3に、学習者にしか見られなかった「ダ体発話」へシフトしやすい状況として「助けを求める時」という状況が抽出された。さらに、「引用内容のみで言い終わっている」ために結果的に「ダ体発話」へシフトしている例も観察された。

上記のような母語話者との相違から、学習者における「ダ体発話」へのシフトは母語話者と同様のコミュニケーション効果をもたらすとは限らないことも分かった。その原因は、学習者がスピーチレベルとそのシフトの機能を十分に意識化しておらず、それらをうまく制御できないことにあると思われる。

第5章では、スピーチレベルと終助詞の共起を取り上げて比較分析した。その結果、母語話者は対人関係や発話の使用状況を考慮して終助詞を使っていることが分かった。言い換えれば、母語話者におけるスピーチレベルと終助詞の共起は初対面の相手に対する話者の配慮を反映しているものであった。具体的には、「か-質問／が／～ね／よ／もの」の5つはほぼ100%「デス・マス体発話」としか共起していない。それは、この5つの終助詞を「ダ体発話」と共に使うと、

初対面の相手に失礼になってしまうからである。また、「ダ体発話」と共起した終助詞について調べると、初対面の相手に失礼にならない場合に使用されているものが多いことが明らかになった。

次に、母語話者の結果をもとに、学習者の終助詞について分析した。その結果、学習者におけるスピーチレベルと終助詞の共起は、母語話者の傾向とさほど大きな差がなく、習得がかなり進んでいることが分かった。しかしながら、「よ」「ね」「けどね／しね／からね」「かな／な」が「ダ体発話」と共に使用された場合、初対面の相手には不適切だと思われる例が、一部の学習者にはあるが、観察された。さらに、スピーチレベルに関係なく、「けどね／しね／からね／よね」などの複合終助詞は母語話者に比べて使用頻度が低く、習得しにくい項目ではないかと思われる。上級の学習者にも以上のような問題が見られたことは、「ダ体発話」に適切な終助詞を付けることは容易ではないことを示唆しており、適切な指導が必要だと考えられる。

第6章では、「中途終了型発話」の表現形式と生起要因について母語話者と学習者を比較分析した。それと同時に、スピーチレベル・シフトにおける「中途終了型発話」の位置付けについても検討した。

まず、表現形式は次の3種類計10形式が抽出された。

- ① 複文の主節が省略されている発話：①テ形表現、②条件形表現、③接続助詞表現
- ② 述部が省略されている発話：④引用表現、⑤トピック提出表現、⑥例示表現、⑦副詞表現、⑧名詞修飾表現、⑨名詞（句）＋格助詞表現、⑩その他
- ③ 形式的には「ダ体」だが、音声的に「ダ体」と認められない発話

これらの表現形式は母語話者にも学習者にも現れているが、それぞれを細分類して見ると、使用分布の違いが観察されたものがあつた。それは、学習者の言語能力の不足に起因すると思われるが、今後さらに調査し、検証する必要がある。

次に、「中途終了型発話」の生起要因については、母語話者の資料をもとに、「(1)同じ情報の繰り返しの回避」、「(2)直接的な質問の回避」、「(3)明言の回避」、「(4)スピーチレベルぼかし」の4つが抽出された。このうち、(3)と(4)の「中途終了型発話」は学習者に見当たらなかった。一方、学習者の資料からは、母語話者と異なる要因として「(5)言語能力の不足による述部使用の回避」と「(6)模倣使用」の2つが見出された。表現形式に見られた相違と合わせて見ると、学習者はまだ「中途終了型発話」を十分に使いこなせていないと考えられる。上記の要因の中で、特に「明言の回避」と「スピーチレベルぼかし」という目的で「中途終了型発話」を使いこなせないと、対人関係の調節に好ましくない影響をもたらす恐れがある。よって、「中途終了型発話」を上級レベルの学習項目として指導する必要があると考える。

さらに、スピーチレベル・シフトにおける「中途終了型発話」の位置付けに関しては、スピーチレベル・シフトと関わりないもの（「(1)同じ情報の繰り返しの回避」）、スピーチレベル・シフトの観点から論じられないもの（「(2)直接的な質問の回避」、「(3)明言の回避」）、スピーチレベル・シフトと深く関わっているもの（「(4)スピーチレベルぼかし」）、の3つに分けられるということ

を主張した。

第7章では、前章までに行ってきた分析から、学習者全員に共通した問題点、及び個々の問題点の2つに分けて考察し、その改善案を提示してみた。

全員に共通した問題点として、[1]助けを求める時に「ダ体発話」へシフトしやすいこと、[2]引用内容のみで言い終わっている例が見られたこと、[3]「ダ体発話」+「ね」を多用していること、[4]スピーチレベルぼかしのための「中途終了型発話」が使えていないこと、の4つが挙げられる。

個々の問題点は重なる項目があるものの、個人にしか見られなかったものが多い。それは、個人の学習経験、学習環境と日本語接触環境が異なっていることの現れであろう。言い換えれば、本稿で得られた結果は、上級学習者の抱えている問題点が必ずしも一様ではないことを反映しているものと思われる。

第8章では、第1章～第7章で判明したことをまとめた。それに基づき、学習者に見られた問題の原因は、①日本語教育現場においてスピーチレベル・シフト等に関する指導がまだ十分に行われていないこと、②学習者の母語（台湾語や中国語）と日本語の違いがあること、の2点に整理できた。

本研究では、スピーチレベル・シフトというコミュニケーション行動を詳細に分析することによって、日本語母語話者が持っている社会言語能力の一端を明らかにすることができた。さらに、日本語母語話者との比較を通して、日本語を母語としない上級日本語学習者に見られる日本語運用上の問題点を明らかにし、問題の原因についても考察した。本研究の成果は日本語教育、とりわけ会話教育に寄与できるものであると考える。

今後、様々な資料を収集し、対人関係調節の仕方についてより多角的に分析し、日本語教育に還元できるような研究を行っていきたい。